



第1部

特集

※第1部は、原則として平成28年度までの動き及び統計資料に基づく記述になっていますが、一部平成29年6月頃までの動き及び統計資料に基づく記述になっています。

巻頭写真

リオデジャネイロの軌跡

2016（平成28）年に開催されたリオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会（以下、「2016年リオ大会」という。）での日本人選手の活躍は、日本に多くの感動を与えました。また、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、「2020年東京大会」という。）の開催に向け、様々な機運の醸成を図る取組が進められています。

一方で、ドーピング*¹はスポーツの価値を貶める深刻な問題であり、日本としても、国内外のドーピング防止活動に積極的に取り組んでいます。

本特集では、これらの取組について紹介します。

第1節 リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックにおける日本人選手の活躍

1 第31回オリンピック競技大会（2016/リオデジャネイロ）での日本人選手の活躍

2016（平成28）年8月5日から8月21日まで開催されたリオデジャネイロオリンピックでは28競技306種目が行われ、日本からは男子選手174人、女子選手164人が参加しました。

日本代表選手団の成績は、金メダル12個、銀メダル8個、銅メダル21個の計41個で史上最多となりました。これに加えて4位から8位の入賞数は計47であり、メダル数と合わせた入賞総数も88と史上最多となりました。日本が得意としてきた柔道、体操、レスリング、水泳の復調・堅持に加え、カヌーや卓球男子、競歩などは史上初のメダル獲得となりました。日本の選手が大舞台で活躍する姿に日本中が沸き返りました。



©フォート・キシモト

- | | | |
|---|---|---|
| 1 | 2 | 1. 2 今大会の日本柔道のメダル数は12（金3，銀1，銅8）
写真1は男子90kg級金 ベイカー兼秋選手，写真2は女子70kg級金 田知本遥選手 |
| 3 | 4 | 3 主将として，日本代表選手団を牽引したレスリング女子フリースタイル53kg級銀メダリスト 吉田沙保理選手
4 女子個人4連覇の偉業を果たし，国民栄誉賞を受賞したレスリング女子フリースタイル58kg級 伊調馨選手 |

*1 参照：第2部第8章第6節 3



©フォート・キシモト

- | | | |
|---|---|--|
| 1 | 2 | 1. 2 3大会ぶりに団体金となった体操男子。写真1は個人総合、団体総合共に金メダルを獲得した内村航平選手
写真2は新技を次々と世に送り出す「ひねり王子」白井健三選手 |
| 3 | 4 | 3 日本勢で金メダル1号となった競泳男子400m個人メドレー萩野公介選手 |
| 5 | 6 | 4 競泳女子200m平泳ぎで金メダルを獲得した金藤理絵選手 |
| 7 | 8 | 5 バドミントン女子ダブルスで金メダルを獲得した「タカ・マツ」ペア 高橋礼華選手、松友美佐紀選手 |
| | | 6 柔道男子73kg級で金メダルを獲得した大野将平選手 |
| | | 7 銅メダルを獲得したシンクロナイズドスイミングチーム。メダルの獲得は2004年アテネ大会以来3大会ぶり |
| | | 8 銅メダルを獲得したカヌー男子カナディアンシングル 羽根田卓也選手。男女を通じて同競技で初めてのメダル |



©フォート・キシモト

- | | | | |
|---|---|---|--|
| 1 | 2 | 1 | 2012年ロンドン大会での銀メダルに続き、銅メダルを獲得した卓球女子団体。写真は石川佳純選手 |
| 2 | 3 | 2 | 団体では銀メダル、シングルスでは銅メダルを獲得した卓球男子 水谷隼選手 |
| 3 | 4 | 3 | 世界を驚かせた日本のバトンパスで銀メダルを獲得した陸上男子4×100mリレー。写真はケンブリッジ飛鳥選手 |
| 4 | 5 | 4 | 銅メダルを獲得したテニス男子シングルス 錦織圭選手。96年ぶりのメダル獲得 |
| 5 | 6 | 5 | 銅メダルを獲得したウエイトリフティング女子48kg級 三宅宏実選手。2大会連続でメダル獲得 |
| 6 | 7 | 6 | 銅メダルを獲得した荒井広宙選手。競歩では男女を通して初めてのメダル獲得 |
| 7 | 8 | 7 | 開会式の様子 |
| | | 8 | 聖火台の様子 |



©フォート・キシモト

- | | | |
|---|---|--|
| 1 | 2 | 1 競泳男子400m個人メドレー, 60年ぶりのダブル表彰台(金:萩野公介選手 銅:瀬戸大也選手) |
| 2 | 3 | 2 銅メダルを獲得した競泳男子4×200mリレー。1964年東京大会以来52年ぶりのメダル |
| 3 | 4 | 3 陸上男子4×100mリレーでは、予選でマークしたアジア新記録を決勝で更に更新し、銀メダルを獲得 |
| 4 | 5 | 4 体操男子団体は1960年ローマ大会から1976年モントリオール大会まで5連覇
2004年アテネ大会に続き、リオ大会では通算7度目の団体金メダルとなった |
| 5 | 6 | 5 快進撃を続け、決勝トーナメント進出を果たした女子バスケットボール |
| 6 | 7 | 6 レスリング女子のメダル数は5(金4, 銀1) |
| 7 | 8 | 7 銅メダルを獲得した卓球女子団体 |
| 8 | | 8 閉会式の様子 |

2 リオ2016パラリンピック競技大会における日本人選手の活躍

リオデジャネイロオリンピックに引き続き、2016（平成28）年9月7日から9月18日まで開催されたリオ2016パラリンピック競技大会では、22競技528種目が行われ、日本からは男子選手86名、女子選手46名が参加しました。

日本代表選手団の成績は、銀メダル10個、銅メダル14個の計24個で、金メダルは獲得できなかったものの、ロンドン2012パラリンピック競技大会（16個）を上回る結果となりました。これに加えて4位から8位の入賞数は計73であり、メダル数と合わせた入賞総数は97となりました。

ボッチャ^{*2}やウィルチェアーラグビー（車椅子ラグビー）で初めてメダルを獲得したことや、入賞者も含め女性や若手選手の活躍が目立ったことに加え、企業の支援が広がり、パラリンピック選手がメディアに登場する機会が増加したこと等により、パラリンピックに対する注目度が大いに高まった大会となりました。



©フォート・キシモト

- | | | |
|---|---|--|
| 1 | 2 | 1 競泳（視覚障害）で銀2個、銅2個のメダルを獲得した木村敬一選手 |
| 3 | 4 | 2 銅メダルを獲得した男子50m自由形（運動機能障害S9）山田拓朗選手。4大会連続出場で悲願のメダル獲得 |
| 5 | 6 | 3 陸上男子400m、1500m（車いすT52）で2個の銀メダルを獲得した佐藤友析選手 |
| | | 4 陸上男子走り幅跳び（切断などT42）で銀メダル、4×100mリレーで銅メダルを獲得した山本篤選手 |
| | | 5 リオパラリンピックにおいてメダル第一号となった柔道男子60kg級（視覚障害）銀メダリスト 廣瀬誠選手 |
| | | 6 銀メダルを獲得したボッチャのチーム（脳性まひ）。同競技初のメダル獲得。写真は廣瀬隆喜選手 |

^{*2} ボッチャ：重度脳性麻痺者など重度障害者のために考案された競技であり、パラリンピックの正式競技となっている。ジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールに、赤又は青のボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競う。



©フォート・キシモト

- | | |
|---|---|
| 1 | 2 |
| 3 | 4 |
| 5 | 6 |
| 7 | 8 |
- 1 自転車男子個人ロードタイムトライアル（運動機能障害C3）で銀メダルを獲得した藤田征樹選手
 - 2 自転車女子タンデム個人ロードタイムトライアル（視覚障害）で銀メダルを獲得した鹿沼由理恵選手とパイロットの田中まい選手
 - 3 銅メダルを獲得した柔道女子57kg級（視覚障害）の廣瀬順子選手。リオパラリンピックで女子初のメダル獲得
 - 4 パラリンピック最終日、リオパラリンピックから初めて採用された女子マラソン（視覚障害）で銀メダルに輝いた道下美里選手
 - 5 2004年アテネ大会から着実に順位を上げてきたウィルチェアラグビー、悲願の銅メダル獲得
 - 6 車椅子テニス男子ダブルスでは、日本勢対決を制し、銅メダルを獲得した国枝慎吾選手、齋田悟司選手
 - 7 陸上女子400m（切断などT47）で銅メダルを獲得した辻沙絵選手
 - 8 卓球女子シングルス（車いす5）で5位入賞を果たした別所キミエ選手



©フォート・キンモト



©X-1

- | | |
|---|---|
| 1 | 2 |
| 3 | 4 |
| 5 | |
- 1 銅メダルを獲得した陸上男子4×100mリレー（切断など）の選手
 - 2 銀メダルを獲得したボッチャのチーム（脳性まひ）の選手
 - 3 パラリンピック開会式における日本代表選手団の様子
 - 4 パラリンピック閉会式の様子
 - 5 日本パラリンピック委員会が開催した特別賞授与式の様子

3 日本人選手を支えた各施設

(1) ハイパフォーマンスサポート・センター

スポーツ庁では、オリンピック競技・パラリンピック競技を対象に、我が国のトップアスリートが世界の強豪国に競り勝ち、確実にメダルを獲得することができるよう、メダル獲得が期待される競技を対象として、スポーツ医・科学、情報面など多方面からの専門的かつ高度な支援を戦略的・包括的に行う「ハイパフォーマンスサポート事業」を実施しています。

ハイパフォーマンスサポート事業の一環として、2016年リオ大会では、競技直前の準備のために選手やコーチが必要とする機能を提供するための拠点となる「ハイパフォーマンスサポート・センター」を、日本スポーツ振興センター、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会、そして各競技団体等と連携して設置しました。特に、平成26年度に厚生労働省から文部科学省の所管となったパラリンピック競技大会については、今回が初めての設置となりました。

2016年リオ大会においては、2012年ロンドンオリンピック競技大会などの国際大会にて設置した「マルチサポート・ハウス」での経験も踏まえ、特に疲労回復のための設備やスポーツ栄養学に基づく食事を充実させるなど、リカバリー（疲労回復）やコンディショニング（体調管理）機能に重点を置きつつ、そのほかに映像分析、リラックス・リフレッシュなどに係る機能を備えた拠点としました。また、リオデジャネイロの治安や衛生環境を考慮し、安全対策を万全に行い、大会期間中のサポートを実施しました。

これらの取組は、日本オリンピック委員会がオリンピック期間中に設置した食事等を提供する拠点「G-Road Station」などともあいまって、大会における選手のパフォーマンスを支える一助となりました。



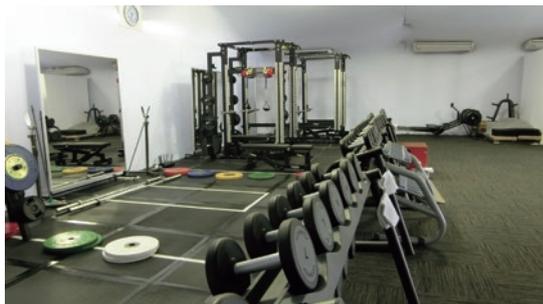
スポーツクラブの一部を借り上げて設置したオリンピック期間中の「ハイパフォーマンスサポート・センター」



パラリンピック期間中は、アクセシビリティを重視し、選手村から徒歩圏にあるビジネスセンター内に拠点を設置

①オリンピック競技大会におけるハイパフォーマンスサポート・センター

オリンピックにおいては、スポーツクラブの一部を借り上げ、各種のトレーニングやマッサージなどのケア、筑波大学が研究開発した機器によるコンディションチェック及び、分析作業やリフレッシュできるスペースの設置などのサポートを提供しました。疲労回復、体調管理、ウエイトコントロールなど、個々のコンディションの課題について対応できる食事の提供、疲労回復のための炭酸泉・温水・冷水を備えたリカバリープールのサポートの利用が多く、関連施設を含めて延べ4,503人に利用され、2012年ロンドンオリンピック競技大会での利用者数を上回りました。



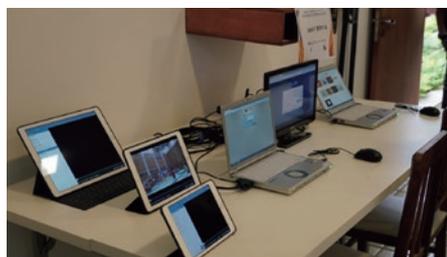
トレーニングルーム



炭酸泉・温水・冷水を備えたリカバリープール



リフレッシュスペース



分析作業スペース

利用した選手からは「日本と同じ、『いつもどおり』の生活ができたことが一番の勝てた要因だと思う。」「身体の疲労回復には欠かせなかった。」「ハイパフォーマンスサポート・センターの存在そのものが心強く感じた。」などの感想が寄せられています。



コンディショニングミール*3の一例

*3 コンディショニングミール：試合期の疲労回復やコンディション管理に対応した食事

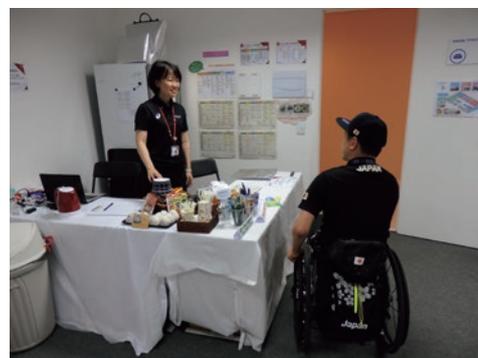
②パラリンピック競技大会におけるハイパフォーマンスサポート・センター

パラリンピックにおいては、アクセシビリティ（利用しやすさ）を重視し、選手村から徒歩圏内にあるビジネスセンター内に設置しました。さらに、福祉車両の配備や、左右からアプローチしやすいトイレ、スロープ・手すりの設置、照度・色の調整など、バリアフリーの観点から選手が利用しやすい環境を整えました。

トレーニングやケア、交代浴（温水と冷水に交互に入る疲労回復方法）、心理相談などができる機能のほか、運動前後の速やかな炭水化物補給に適したリカバリーミールボックス（持ち出し用の補食）を提供しました。また、大会情報を収集できるラウンジでは、他競技の選手との交流も生まれるなど、選手たちがリラックスしながら試合に向けた最終準備を行うことができる環境を提供し、延べ738人に利用されました。



福祉車両の配備や、スロープ・手すりの設置



リラックスのためのラウンジの様子



トレーニングやケアのためのスペース

利用した選手からは「利便性も良く、移動のストレスもなし。セキュリティも万全だった。」「メダルという結果につながった一つの要因だと思う。」などの感想が寄せられています。

(2) ナショナルトレーニングセンター (NTC)

NTCは、我が国のトップアスリート（競技者）が同一の活動拠点で集中的・継続的な強化活動を行うための拠点として、東京都北区西が丘の国立スポーツ科学センター（JISS）に隣接して整備されました。NTCは、平成19年1月に「陸上トレーニング場」を設置、20年1月に10競技（ボクシング、ウエイトリフティング、レスリング、柔道、卓球、ハンドボール、バスケットボール、体操、バレーボール、バドミントン）の専用練習場を備えた「屋内トレーニングセンター」、「屋内テニスコート」及び栄養管理食堂や大浴場を備えた「アスリートヴィレッジ（宿泊施設）」を設置しました。



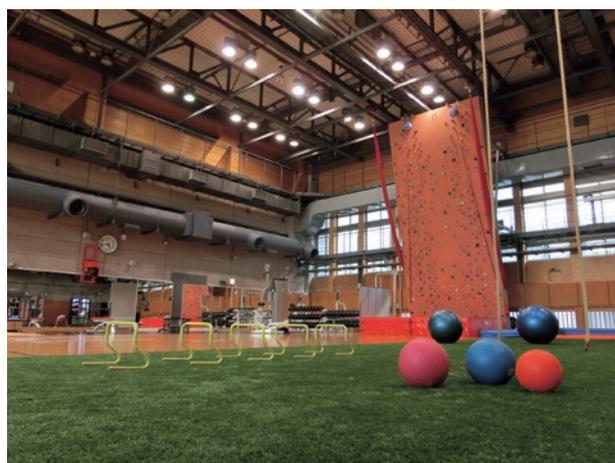
- ・10競技の専用練習場が集まる屋内トレーニングセンター（上段左）
- ・6面のコートを有するレスリング場。マットを2016年リオ大会仕様になっている（上段右）
- ・男女全ての種目が同時に行える世界最大規模の「体操練習場」。2016年リオ大会に向けて器具などをリオ仕様になっている。（中段）
- ・10面のコートを有するバドミントン場。コートマットを2016年リオ大会仕様になっている。（下段右）
- ・卓球場。一部の卓球台を2016年リオ大会仕様になっている。（下段左）



(3) 国立スポーツ科学センター (JISS)

スポーツ医・科学研究推進の中核機関として、平成13年に設置され、研究成果を踏まえた科学的トレーニングやスポーツ障害に対する医学的サポート、スポーツに関する各種情報の収集・分析・提供などを一体的に行い、我が国の国際競技力の向上を支援しています。

主要施設には、スポーツ科学研究施設（ハイパフォーマンス・ジム、バイオメカニクス実験室、ボート・カヌー実験場、生化学実験室、環境制御実験室、映像編集室等）、メディカルセンター施設（放射線検査室、栄養相談室、診察室等）、トレーニング施設（トレーニング体育館、射撃練習場等）、専用練習場（競泳、シンクロナイズドスイミング、フェンシング、新体操、トランポリン）、サービス施設（栄養指導食堂、低酸素宿泊室、研修室等）などがあり、2016年リオ大会に向けて、多くの競技者が利用しました。



- ・ 研究施設等を備えた国立スポーツ科学センターの外観（上段左）
- ・ ハイパフォーマンス・ジム（上段右）
- ・ 栄養指導食堂（中段左）
- ・ スポーツ障害の診療や医・科学研究に用いられる磁気共鳴画像診断装置（MRI）（中段右）
- ・ 血液や唾液、尿などの分析を行うことのできる生化学実験室（下段右）



第2節 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会へ向けた機運の醸成

2016年リオ大会の盛り上がりを引き継ぎ、2020年東京大会へ向けた機運の醸成を図るため様々な取組が進められています。2016年リオ大会開催期間中に設置されたジャパンハウス、オリンピック・パラリンピックメダリスト等による合同パレード、スポーツ・文化・ワールド・フォーラムの開催等、2016（平成28）年は正に2020年東京大会に向けたキックオフの年となりました。

1 リオデジャネイロにおける広報（ジャパンハウス）

2016（平成28）年8月5日から8月21日（オリンピック期間）及び9月7日から9月18日（パラリンピック期間）、リオデジャネイロにおいて、「Tokyo 2020 JAPAN HOUSE」（以下、「ジャパンハウス」という。）が設置されました。ジャパンハウスは、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が東京都や関係省庁と連携し主催したものであり、大会開催期間を通じて、2020年東京大会や東京・日本の魅力を全世界に発信しました。



- | | | |
|---|---|--|
| 1 | 2 | 1 ウェルカムボード |
| | | 2 日本政府エリア（文化庁ブースのひな人形15段飾りの展示） |
| 3 | 4 | 3 日本政府エリア（スポーツ庁ブースで、日本発祥のスポーツ・レクリエーションの体験会を開催） |
| | | 4 地方公共団体エリア |

2 リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック日本代表選手団合同パレード

2016年リオ大会の興奮が冷めやらぬ2016（平成28）年10月7日、メダリストによる凱旋パレードが東京都内で行われました。2012年ロンドン大会の際は、オリンピック選手のみのパレードでしたが、今回は初めてのオリンピック・パラリンピック選手合同のパレードとなりました。虎ノ門ヒルズ前での出発式の後、銀座8丁目から日本橋室町3丁目までの2.5kmのコースを約1時間かけたパレードが行われ、沿道には2012年ロンドン大会時の約50万人を上回る約80万人もの観衆が詰め掛けました。



©フォート・キシモト

- | | |
|---|-----------------------|
| 1 | 1 上空からの様子 |
| 2 | 2 オリンピック選手用パレード車からの様子 |
| 3 | 3 パラリンピック選手用パレード車の様子 |

3 スポーツ・文化・ワールド・フォーラムの開催

スポーツ・文化・ワールド・フォーラムは、2016年リオ大会直後の2016（平成28）年10月19日から10月22日に掛けて、東京、京都において開催された大規模な国際フォーラムです。ラグビーワールドカップ2019（以下、「RWC2019」という。）、2020年東京大会、ワールドマスターズゲームズ2021関西等に向けて、観光とも連動させつつスポーツや文化による国際貢献や有形・無形のレガシー（遺産）等について議論、情報発信し、国際的な機運を高めるためのキックオフイベントとして開催されました。本フォーラムには国内外のスポーツ・文化を担当する大臣、国際的なスポーツ関係団体のトップ、グローバル企業のトップ、世界経済フォーラムのヤング・グローバル・リーダー、著名研究者及び国内外主要経済メディア等、総勢延べ約7,500人が参加しました。スポーツ、文化、ビジネスの枠を超えて、スポーツ・文化の力や新しい経済について議論する場、また同時に人々のネットワーク創出の場となりました。



左から松野文部科学大臣、シュワブ世界経済フォーラム会長、クレイブン国際パラリンピック委員会会長、バツハ国際オリンピック委員会会長、ボームントワールドラグビー会長



京都会場におけるクリスタルアワード受賞者
タン・スイーヒャン氏によるパフォーマンス
※クリスタルアワード：世界経済フォーラムが国際社会の文化交流と世界平和に貢献した芸術家文化人に授与する賞


World Forum on Sport and Culture
 スポーツ・文化・ワールド・フォーラム

《主な内容》			
(1) 京都オープニング・東京プレナリー	(2) 国際会議	(3) 官民ワークショップ	(4) 文化イベント
<p>【京都オープニング】 義家副大臣による開会宣言</p>  <p>【東京プレナリー】 森東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長等スポーツ界、経済界の代表による挨拶・基調講演や、官民パネルを実施</p>	<p>【スポーツ関係】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ大臣会合 ・スポーツセッション  <p>【文化関係】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化会議全体会 「2020年を見据えた文化による国づくりを目指して」（通称：京都宣言）を発表。 ・文化会議分科会 	<p>ダボス会議を主催する世界経済フォーラムと日本政府が連携して26のセッションを実施</p>  	<p>日本の伝統芸能や文化をアピールできるようなイベントを実施</p>   <p>東京・京都の各地において、六本木アートナイト等の各種協賛イベントと連携</p>

主催：文部科学省・スポーツ庁・文化庁
 共催：京都府・京都市・公益財団法人日本財団・特定非営利活動法人エティック
 協力：世界経済フォーラム

文化関係では、京都において文化会議全体会が開催され、国内外の著名人による基調講演や、文化による国づくりに向けた宣言、「2020年を見据えた文化による国づくりを目指して」(通称：京都宣言)の発表が行われました。



京都会場での招待者お出迎えの様子



文化会議分科会「文化芸術活動を通じた多様性を尊重する社会の実現に向けて」より

文化会議分科会では、文化プログラムを全国展開していくための機運を醸成することを目指し、文化プログラムにつながる各地の意欲的な取組と、文化プログラムの実施を通じて創出すべき文化的レガシー(遺産)等について議論が行われました。あわせて、車いすダンスの公演や小学生とアイドルグループの合唱、アール・ブリュット*⁴作品の展示が行われました。

また、本フォーラムでは、外国人の参加者を多く迎え、世界遺産である二条城や神社仏閣等を活用し、我が国の伝統芸能等と海外文化・現代アート等が調和したイベントが開催されました。



文化会議分科会「文化芸術資源で未来をつくる～輝き続ける日本へ～」より



左から岡村JRFU会長、
ボームントWR会長、
御手洗RWC2019組織委員会会長

スポーツ関係では「ラグビーの魅力・ラグビーワールドカップの力」のセッションにおいて、アジア初のラグビーワールドカップの開催国として、ラグビーの魅力のアジア等の国々へ伝承することによるラグビーの普及促進及びラグビーワールドカップの開催がもたらす国内外の社会的・経済的な発展の可能性等について議論が行われました。また、「オリンピック・パラリンピックがもたらすレガシー」セッションでは、2020年東京大会のレガシー(遺産)として、国民がスポーツに親しみ、応援する環境を整備していくことに加え、共生社会の実現や文化・教育など幅広い分野でレガシー(遺産)を残していくことの重要性についてアスリート(競技者)等を登壇者に加え議論が行われました。

*⁴ アール・ブリュット：フランスの画家ジャン・デュビュッフェによって考案された言葉であり、「加工されていない、生の芸術」を意味する。デュビュッフェは、精神障害のある人や幻視家などが制作した絵画や彫刻をアール・ブリュットと呼び、それらの美術の専門教育を受けていない人々の作品を、「もっとも純粋で、もっとも無垢な芸術であり、作り手の発想の力のみが生み出すもの」とであると高く評価した。
(出典)文化庁「障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会中間取りまとめ」(平成25年8月26日)

スポーツ大臣会合においては、35か国の大臣を含む69か国の各国代表と共に、我が国のスポーツを通じた国際貢献の取組である「Sport for Tomorrow」をテーマに、三つの柱（「開発と平和のためのスポーツ」・「スポーツ・フォー・オール」・「スポーツのインテグリティ（誠実性・健全性・高潔性）保護」）の下、2020年東京大会の開催国である日本から「スポーツの力」についてメッセージの発信が行われました。

その他、松野文部科学大臣、水落文部科学副大臣、田野瀬文部科学大臣政務官、鈴木スポーツ庁長官は、計33か国の各国スポーツ大臣と二国間や多国間の会談を行い、4か国（ブラジル、アルゼンチン、オランダ、ジブチ）との二国間の協力覚書の署名式を実施しました。



スポーツ大臣会合より

4 文化プログラムの推進

オリンピック・パラリンピックは、スポーツの祭典であるとともに、文化の祭典です。2016年リオ大会後からは「東京2020文化オリンピアード」、「beyond2020プログラム」の認証も始まり、2020年東京大会に向けた文化プログラムがスタートしました*5。

文部科学省でも、「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」を皮切りに、全国各地での文化プログラムの展開を推進すべく、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会や関係省庁等と連携し認証制度の普及に取り組むとともに、日本遺産を2020年までに100件程度認定する等、様々な文化プログラムの実施に取り組んでいます*6。

（1）東京2020文化オリンピアード（文化庁主催による主な事例）

- ①スポーツ・文化・ワールド・フォーラム京都プログラム文化会議分科会「文化資源で未来をつくる～輝き続ける日本へ～」(写真左)
- ②神社・仏閣・能楽堂などを活用した実演芸術拠点形成プロジェクト（写真右）



*5 参照：第2部第9章第1節 4

*6 参照：第2部第9章第5節 13

(2) beyond2020プログラム（文化庁主催による主な事例）

- ①フライデー・ナイト・ミュージアム@上野（写真左）
- ②Arts in Bunkacho～トキメキが、爆発だ～（芸術系大学連携による人材育成型アートプロジェクト）（写真右）



(3) 日本遺産（4 件例示）

- ①「信長公のおもてなし」が息づく戦国城下町・岐阜【岐阜県岐阜市】
- ②丹波篠山デカンショ節—民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶—【兵庫県篠山市】



船上の遊宴文化：鵜飼と共に発展したおもてなし文化



デカンショ節：民謡は丹波篠山をあらわし、江戸時代から歌い継がれている

- ③政宗が育んだ“伊達”な文化【宮城県（仙台市、^{だて}塩竈市、^{しおがま}多賀城市、松島市）】

- ④江戸庶民の信仰と行楽の地～巨大な木太刀を担いで「大山詣り」～【神奈川県伊勢原市】



^{しおがま}鹽竈神社帆手祭・花祭



^{おおやまあふり}大山阿夫利神社の「巫子舞」

5 ホストタウンの推進

2020年東京大会の開催により多くの選手、観客等が訪問することを契機に、地域の活性化等を推進するため、「ホストタウン」を全国に広げるための取組を進めています。「ホストタウン」とは、事前キャンプの誘致等を通じ大会参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図る地方公共団体のことです。平成28年12月9日には、ホストタウンの第3次登録団体を公表し、登録数は138件となりました。2020年東京大会に向けて今後も取組の推進が期待されています。



神奈川県平塚市とリトアニアとの交流



静岡県焼津市とモンゴルとの交流



千葉県山武市とスリランカとの交流

第3節

アンチ・ドーピング体制の推進について

1 リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会の光と影

2016年リオ大会は、日本代表選手の活躍をはじめ、多くの感動をもたらした一方で、ドーピングの問題が影を落とした大会でもありました。また、その前後には2012年北京大会、2016年ロンドン大会に出場した選手の検体が再検査され、多くの違反が見付かり、メダルはく奪などの処分が下されています。このようにドーピングは、フェアプレーに徹するアスリート（競技者）を裏切る行為であり、スポーツの価値を貶める深刻な問題^{おとし}となっていることから、スポーツ界全体でドーピングの撲滅に取り組む必要があります。

日本は、国内外のドーピング防止活動に熱心に取り組んでいることや、日本人アスリート（競技者）のドーピング違反が少ないことなどから、国際的にも高く評価されています。このため、RWC2019や2020年東京大会等の大きな国際競技大会を控える我が国に対しては、それらの大会をドーピングのないクリーンな大会として成功させることが期待されており、より一層アンチ・ドーピング体制の強化に取り組まなければなりません。

2 ドーピング防止活動における課題

日本を含めた国際的なドーピング防止活動においては、①ドーピングを企てる側と取り締まる側の間で「たちごっこ」の状態であること（図表1-1-1に示した世界ドーピング防止規程における10の違反のうち、ドーピング検査だけで取り締まれる違反は1から3のみであり、その他の違反については取り締まりが難しいのが現状。）、②医師や薬剤師等の薬を処方する医療従事者に対する啓発活動が十分とは言えないこと、③巧妙化・高度化するドーピングに対応する新たな検査手法等の開発が必要なこと、④ロシアで起こったとされるドーピング問題を受け、組織的ドーピングへの対応が必要になってきたことなどの課題がありま

す（図表 1-1-1）。

これらの課題に加え、2020年東京大会が控える我が国には、国際オリンピック委員会（IOC）や世界ドーピング防止機構（WADA）から、ドーピングに関する情報（インテリジェンス）について、省庁を含む関係機関の間で共有できる仕組みを構築することが求められています。また、RWC2019、2020年東京大会に向けて特に注力すべき取組として、RWC2019については、各会場にドーピング検査室を適切に整備することなどが求められています。2020年東京大会については、図表に示したとおり、毎年の年間検査数と同程度の検査を大会期間内（約5週間）に行うことになるため、検査に関わる人材と分析に関わる人材の確保が重要です。中でもドーピング検査員については、世界各国から参加するアスリート（競技者）の検査に対応できるよう、言語能力や豊富な実地経験を有する検査員を、計画的に育成し確保していく必要があります（図表 1-1-2）。

3 今後の解決方策と達成手段

文部科学省では、このような状況を受けて、平成28年1月から「アンチ・ドーピング体制の構築・強化に向けたタスクフォース」を開催し、8回の会合を重ねて、28年11月8日に報告書を取りまとめました。

タスクフォースにおいては、我が国が喫緊に取り組まなければならないこととして、①ドーピング検査の実効性の向上、情報（インテリジェンス）共有体制の整備、②ドーピング検査員などの専門人材の育成、アスリート（競技者）やサポートスタッフ、医師・薬剤師等への啓発活動の充実、学校教育における教育・啓発活動の展開、③巧妙化・高度化するドーピングに対応する新たな検査手法やアスリート（競技者）の負担を軽減する検査手法の研究開発の充実・強化、④組織的ドーピングに対するWADAを中心とした国際的対応への積極的な関与等が挙げられています。それらの課題を解決するために、法的措置を含めた対応を検討していくこととなりました。

4 ドーピングのないクリーンなスポーツの実現に向けて

今後は、タスクフォースで議論した内容を基に、RWC2019、2020年東京大会をはじめ我が国で開催される国際競技大会が公正かつ公平な環境の下で行われるようアンチ・ドーピング体制を強化していくことが求められます。文部科学省は、ドーピングのないクリーンなスポーツを実現し、スポーツの価値を守るよう、引き続き関係省庁及び関係機関と連携し、

図表 1-1-1 ドーピング違反要件

No.	ドーピング違反要件
1	アスリートの検体（尿・血液）に禁止物質が存在する
2	アスリートが禁止物質を使用する、又は使用を企てる
3	検体採取の回避、拒否、又は不履行
4	居場所情報（※）関連義務違反
5	ドーピング検査プロセスの一部に不当な変更を施す
6	禁止物質又は禁止方法を保有する
7	禁止物質等の不正取引を実行する、又は企てる
8	アスリートに対し、禁止物質等を投与する、又は企てる
9	ドーピング違反に意図的に関与する
10	禁止される特定の対象者との関わりを持つ

※トップアスリートは抜き打ち検査に対応できるよう検査を受けられる時間帯（毎日1時間）と居場所を登録することになっている

図表 1-1-2

2020オリンピック・パラリンピック東京大会に向けたドーピング検査体制について



教育・啓発活動や研究開発事業を通じた国内外のアンチ・ドーピング活動に取り組むことと
しています。